

はじめに

フィリピン・マニラに派遣され、日本人学校での教育活動に携われたことは、私の人生にとって非常に大きな糧となった。東南アジアの熱気ある人々の暮らしに囲まれ、異文化に身を置きながら全国から集まった熱意ある教師達と共に日々研鑽に励んだことは、一生涯忘れることのない貴重な体験であった。任期を終えて帰国した今だからこそ、かけがえのない 3 年間だったことをしみじみと実感することができる。私にこのような機会を与えてくださった埼玉県教育委員会、そして派遣に伴い多大なるご尽力をいただいた埼玉県国際理解教育研究会の皆さまに、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

さて、今回帰国報告書を作成するにあたり、マニラでの様々な出来事や場面を改めて思い出してみた。やはり 3 年間、心血注いで勤めあげたマニラ日本人学校には並々ならぬ思い入れがあり、そこで経験し学んだことは、今後の教員人生にも深く影響を及ぼすものと考えられる。また日本とは、文化の全く異なるフィリピンでの生活からは、日本では決して経験することのない数多くの事柄を学んだ。そこで本レポートでは、〔教育活動編〕及び〔生活編〕と称して、それぞれの中でも特に印象に残った出来事や、特徴的な事柄を取り上げることにする。

〔教育活動編〕

マニラ日本人学校概要

マニラ日本人学校（通称 M J S、以降 M J S と表記）は、小中学部併せて 400 名弱の中規模学校である。しかしここ数年、毎年数十名単位で児童生徒数が減少傾向にある。私が派遣された 3 年間だけで、およそ 50 名あまりの減少がみられた。これは昨今の経済不況のため、多くの企業がフィリピンからの撤退を余儀なくされていること、同時に企業からの海外赴任が、家族同伴から単身へと移行していることが要因として挙げられる。これは学校運営上、非常に大きな問題であり、会議の場においては、事務方から常々報告されている事だ。このように財政面での危機感を抱えてはいるが、M J S に通う児童生徒は非常に明るく元気で、いじめなどの陰湿で暗い側面が全く感じられない素晴らしい学校である。よく聞く話に、日本では様々な理由で不登校だった児童生徒が、マニラに来てからは、見違えるように表情が生き生きと変わり、M J S へ通学することが楽しみになる、という事実がある。実際に 3 年間で私が担任した生徒の中にも、同様のケースが数回あった。始めのうちは緊張で硬かった表情が、日に日に穏やかなものになり、数ヶ月もすれば自然と学校大好き人間に変貌していくのである。これについては派遣期間中、私なりに分析したことがある。要因の 1 つは、日本全国から集まった数少ない日本人同士、互いに助け合い、認め合おうとする姿勢が、M J S の校風として長い時間の中で校内に浸透しきっていること。2 つめは、P T A 活動が非常に活発で、常日頃から校内には保護者の姿があり、児童生徒を見守っていること。そして 3 つめに、この校風を守るべく強い意志を持った教職員が、どんな小さな芽も見逃さず、学校を守ろうとする高い意識で努力していることだ。また我々教職員の依頼を快く引き受け、児童生徒に親切に対応し、毎朝元気なあいさつで迎えてくれるローカルスタッフ達の笑顔にも、人を優しい気持ちにさせる要因が多分にあると考えられる。いずれにしても M J S は、児童生徒、保護者、教職員、ローカルスタッフと、全ての人から愛されている学校なのである。

さて、児童生徒は毎朝 7 時 30 分までに登校する。登下校は安全確保のため、スクールバスか自家用車での送迎となっている。防犯上、門扉は 24 時間、複数のガードマンによって警備され、許可証のない車は入校できない。逆に許可証があれば、児童生徒が忘れ物をしたとき、教職員が仕事をしたいときなど 24 時間、365 日いつでも入ることができる。職員は 20 名程度の文科省派遣教員の他、海外子女教育財団派遣教員、現地採用の日本人教員が中心となって、教育活動を賄っている。しかしこのほかにも英会話教師、スクールナースを始めとして、事務職員、ガードマン、ガーデナー、メンテナー、バスアテンダント…など、数多くのローカルスタッフが、日

